

て、データ表現形式を吟味する。XML形式から運用可能なデータベースへの(半)自動変換は、近時例が増えて来たため、大きな困難はないものと見込んでいる。尚、回線事情が許せば、インターネットからのデータベース検索も可能にする予定である。

A04「古典の世界像」

A04-30・計画研究 東アジアの科学と思想

研究代表者 川原 秀城
東京大学大学院人文社会系研究科 教授
研究分担者 梁 一模
東京大学大学院人文社会系研究科 助手

研究目的

本研究の目的は、東アジアの前近代の科学関連資料・科学古典を収集整理し、それを通して当時の科学と科学思想を、東アジア文明総体の中に位置付けるところにある。具体的には分析の時代を18から19世紀に限定して、中国明清期の漢訳西洋科学書と伝統の暦算学書と医学書、朝鮮時代の天文数学書と医学書を読解・比較分析し、東アジアの科学の流れとその総合的な特徴を考察する。方法論的には、総合的視点をもって東アジア科学の全体を分析するところが新しく、目論んでいることといえば、現在、世界的に見て研究が手薄である朝鮮科学の正当な評価にほかならない。

今回、朝鮮18、19世紀に研究の重点を移動する予定であるが、それは11、12年度の研究を通して、朝鮮時代の漢籍や韓国 OS 用の CD ROM 収集にもめどが立ち、17世紀朝鮮数学や19世紀中国の西学輸入について斬新な研究成果をえることができたからである。当初の予想を越えて朝鮮文献の収集がうまくいっているのは、韓国研究者の援助と、研究分担者が韓国学界の事情に精通していることに負うところが大きい。

研究計画・方法

研究代表者と研究分担者の間の研究分担に関する基本原則(基本合意)は、研究代表者が東アジア科学古典の学説の分析を中心とするのにたいし、研究分担者は外的アプローチを試み、思想や文化との関係に注目して中国と朝鮮の科学を分析するところにある。

13年度は11、12年度の研究成果を踏まえて、大きく

二つのことを追求する。一つは東アジア、主に朝鮮の科学関連基本資料を収集することである。日本には朝鮮科学史関連図書の数が絶対的に不足しており、後世の人文研究に支障が生じないためにも、その収集整理は必要不可欠といわねばならない。他の一つは文献解読であり、後半期については18～19世紀の朝鮮科学と科学思想の文献の分析に時間と精力を集中する。具体的には、研究代表者は17世紀朝鮮数学の分析につづいて18～19世紀の東算書の読解を試み、研究分担者は19世紀中国の科学思想の分析をつげながら、朝鮮19世紀の西学輸入の問題に新たな展開を試みる。また本年度以降については、訪韓にくわえて11、12年度にあまりできなかった訪中を実施し、中国科学院自然科学史研究所の研究者と学術交流を果たしたいと思っている。

A04-31・計画研究

中国における制度と古典 科举制度と言語史・文学史の相関から

研究代表者 平田 昌司
京都大学文学研究科 教授
研究分担者 田口 一郎
新潟大学人文学部 助教授

研究目的

中国の言語史(ないし言語規範意識の歴史)は、文学史・制度史を始めとするさまざまな領域に大きな関わりを持ちつづけている。

問題の所在を最も顕著に示すのは、官僚有資格者選抜試験としての科举にほかならない。その出題方法の変化、試験規則の改定の裏には、往々にして言語の史的变化や方言対立(地域間対立)がひそんでいる。科举史と言語史とを結びつけた研究をおこなうことにより、中国において権威的な地位を付与された言語が、いかなる機能を果たしてきたか、6～20世紀という長期間にわたる観察が可能になる。

11～12年度の研究においては、対象を主に11世紀までとした。13～14年度は、重点を南宋・金・元・明代(12～16世紀)に移し、(1)11世紀までにほぼ完成をみていた科举制度の言語規範は、非漢民族(遼・金・元)のもとでどのように運用されたか、(2)皇帝が非漢人から漢人へとかわった元・明の交替期に、モンゴルの残した言語規範意識はどのように継承されたか、

(3) 対象とする時期の中国語方言は、どのように社会史と関わっていたか、(4) 南宋の朱子により構想され、元代に実践された「道学」中心の試験制度・文体観は、以後の中国および東アジアの文章にいかなる痕跡をとどめたか、について考察する。

以上の実証研究をとおして、言語史と他の領域とを連携させた研究の、具体的な手法を新たに提示することをめざしている。

研究計画

(a) 科挙受験者の利用した学習参考書は、その通俗性ゆえ、研究機関において重視されることが少なかった。本研究は、国内各機関の所蔵資料の調査・収集をすすめる。試験禁則規定集としての役割をはたした韻書(発音字典)、受験指導用の各種文体選集に関して、多くの資料を蓄積できるよう努力する。

(b) 音韻・書写文字規範として長く用いられたのが、いわゆる韻書にほかならない。13年度は、『礼部韻略』系諸韻書(『新刊韻略』『増補校正音韻釋疑』など)が、北宋で作られて以降、漢人のあいだで伝承されるのみならず、金・元などの非漢人支配下でも広く利用され、流布していった過程につき考察する。これによって現在までの中国人が音韻(避諱)・書写文字の基準を定めるにあたってなにもとづいたか、規範形成史を検証することが可能になるであろう。14年度は、科挙の出題から韻文を排除した明代以降、韻書はいかなる意義を有する存在となったかを検討する。

(c) 中国の古典文は、かつて東アジア全体に通用する「橋渡し言語」としての地位を占めた。中央における文体の好尚は、しばしば周縁地域にまで影響をひろげている。明代において重視された、科挙試験答案作成の標準文体「八股文」および道学的思潮は、それに順応あるいは反発した、さまざまな文体を生んだと言っている。その中でも「古文辞」は、日本に伝播して広く流行したことで知られる。本研究は、音韻・文字にとどまらず、語彙・文体の言語的制度化をも考察対象とする目的から、「八股文」および非「八股文」の対照研究を課題のひとつに加える。具体的には、研究分担者田口一郎氏との協力のもとで、荻生徂徠(1666-1728)の文集『徂徠集』『徂徠集拾遺』全体の日本語訳文の作成・公開をめざす。これによって、東アジアにおける中国古典文の歴史を描くにあたっての基礎資料のひとつを提供する。

A04-32・計画研究

原始仏教思想の解明

バラモン教聖典の同時的解明を通じて

研究代表者 中谷 英明
神戸学院大学人文学部 教授

研究目的

パーリ仏典のうち、『スッタニパータ』、『ダンマパダ』、『サンユッタニカーヤ』などの諸仏典は、これまで最初期仏典としてほとんど区別なく扱われ、本文解釈がなされてきた。これは近代の仏教学者が、紀元後5世紀頃に制作されたパーリ注釈書の解釈に従ってきたからである。しかし実際には、仏陀の死後8世紀を経過し、教理体系が整備された時代の解釈は、テキスト本来の意味としばしば乖離している。申請者は、初期仏典の音韻、韻律、語形、構文、語彙、思想について統計分析を行い、バラモン教聖典『シャタパタ・ブラーフマナ』、古層『ウパニシャッド』との比較を通じ、初期仏典に4層が区別されること、またアショーカ王碑文の言語との関係および内容(孤独な遊行生活の推奨)から、その最古層部分(『スッタニパータ』の一部等)は、アショーカ王以前に遡り、教団生活を前提する次の層とは1世紀以上の懸隔があることを指摘した。

この最古層テキストを、注釈書に依拠するのではなく、その層固有の思想を提示するものとして読解する時、そこには他の層と明瞭に異なる世界観が現われる。生き生きとした現実感覚、呪術的なものの否定、理性を感情や肉体とともに捉える視点、また人間行動の動因としての「潜在欲望」の確認など、教理によって硬直した後代のテキストには見られない、直裁かつ柔軟な思考が読み取られる。それは従来考えられていたよりはるかに『ウパニシャッド』哲学に近似する。このように両宗教の聖典を読み合わせることにより、両者の解釈を同時に深め、草創期の仏教の宗教的本質を明らかにすること、これが本研究の目的である。

研究計画・方法

平成11年度には、上述の手続きによって抽出した仏典の最古層と『シャタパタ・ブラーフマナ』・古層『ウパニシャッド』とを読み合わせ、綿密に分析しつつ、読解を進める。

『ウパニシャッド』、『ブラーフマナ』、仏教学関係文献の整備 バラモン教聖典関係図書+仏教学関係図書費

『シャタパタ・ブラーフマナ』データベースの欠落
部作成 謝金

韻律分析プログラム・統計表作成プログラムの改良
謝金（専門的知識の提供）

外国の学者との研究打合わせ

『ヴェーダ』分野の専門家ハーヴァード大学 M.Wit-
zel 教授と研究情報を交換する。 外国旅費

国内の学者との研究打合わせ

『ウパニシャッド』、『ブラーフマナ』に関し国内の
専門家と研究情報を交換する。 国内旅費

A04-33・計画研究

イラン・イスラーム文献が描くモンゴル時代の 世界像の研究

研究代表者 杉山 正明
京都大学大学院文学研究科 教授

研究分担者 志茂 碩敏
財団法人東洋文庫研究部 研究員

研究目的

1. 本研究の研究目的

人類史上ではじめて世界が一個の全体像としてとら
えられるようになった13・14世紀のモンゴル時代につ
いて、東西文明の枠をこえて、多言語文献による知見
を生かしつつイラン・イスラーム文献の根本研究をお
こない、当時の世界像を探ること。さらに、それによ
って古典研究の新しい視座を模索するうえでの有益な
例示とすること。

2. 本研究の学術的特色・意義

1) 東西の研究者の「棲みわけ」をこえた多言語文
献にもとづくイラン・イスラーム文献の根本研究とそ
れによるモンゴル時代の全体像の構築。

2) 原写本・原刊本など根本状態の原典文献群に溯
る研究。

3) 日本人による新しい世界像・古典研究の例示。

3. 国内外の関連研究における位置

今までにない新しい地平を開くことになる。

4. 準備状況

マイクロフィルム化したイラン・イスラーム文献を
大量に入手済であるほか、準備は十分である。

研究計画・方法

本研究のかなめとなるのは、すでに入手済の大量の

マイクロフィルムを紙焼き写真の形に焼きつけて、読
める状態にもってゆくことである。その焼きつけ費用
は膨大であり、研究経費の多くをマイクロフィルム焼
きつけ費に集中的にふりむける。研究代表者がこれに
関連する作業をおこない、複写を1部研究分担者に提
供して、相互に緊密な連絡をとりつつ研究を推進する。

A04-34・計画研究

イスラームにおける伝承知と理性知

研究代表者 濱田 正美
神戸大学文学部 教授

研究分担者 野元 晋
慶應大学言語文化研究所 講師

研究目的

イスラームにおける様々な知のあり方を明らかにす
ることが最終的な目標であり、オスマン朝を中心とす
るトルコ・イスラーム世界とシーア派、就中イスマー
イル派とが持っていた世界観、人間観、宗教観をそ
れぞれの残した文献資料に基づいて解明する。より具
体的には、彼らの著作の写本や刊本を利用して、その
翻訳を試み、同時に歴史的、思想的文脈に沿った注解
を施す作業により彼らの思想を総合的に把握すること
が目的である。

厳密な写本校訂の作業に立脚して思想研究を行うこ
とが、古典文献学の本道であることは言うまでもない
が、わが国のイスラーム研究においてはこの原則が当
面の成果を求める余りやや閑却に付されてきたことも
否めない。文献批判に基づく思想研究の試みには多大
の意義があると考えられる。

研究計画・方法

研究代表者濱田はオスマン朝歴史文献を中心とし、
同時に中央アジアを含むトルコのイスラーム世界の文
献を、研究分担者野元はシーア派の思想文献をそれぞ
れ対象として、基本的に独立して研究を進め、共通の
課題である「伝承知と理性知」のあり方の究明に努め
る。

1) コンピューターを用いて、テキストの対照研究を
可能にするため、濱田はオスマン朝の歴史家ムスタフ
ァ・アーリー及び中央アジアの聖者伝を、野元はアブ
ー・ハーディム・アッ・ラーズイーの代表的著作の本
文を確定し、そのデジタル化を引き続き行う。

2) 校訂テキストを作製するための写本のコピーや、注解に必要な関連文献を調査収集する。そのために現地調査をおこない該当分野に関する情報を収集するとともに、成果の発表をおこなう。このために外国旅費を計上する。

A04-35・計画研究

ユダヤ教キリスト教における創造的営為としての聖典解釈の比較研究

研究代表者 市川 裕
東京大学大学院人文社会系研究科 助教授

研究分担者 中村 信博
同志社女子大学現代社会学部 教授

鶴岡 賀雄
東京大学大学院人文社会系研究科 助教授

研究計画

本研究は、ユダヤ教とキリスト教という、「旧約聖書」を聖典として共有する二つの姉妹宗教における創造的営為としての聖典解釈の比較研究である。

研究代表者である市川裕は、過去二年間の研究推進の結果、ユダヤ教的思惟方法の特徴を際立たせるには、同じく聖書を受容しつつも異なった思想を生み出したキリスト教との比較研究の必要を痛感し、二人の研究分担者をたてるに至った。

本研究の目指すところは、聖書解釈における宗教伝統それ事態を対象にする試みであり、伝統を介在させることが、古典の理解の妨げになるのではなく、むしろ読み手と古典とを仲介する積極的意義があるものと位置づけることを眼目とし、その方法論を明確化すること、そしてさらに、考えられたこと(thought)のみならず、考えるという能動的な過程(thinking)の方により多く注目することで、聖書解釈がもっている創造的な思考のプロセスを提示することである。本研究では、四つの目的、すなわち、「伝統の位置づけ」、「解釈という創造的営み」、「思想でなく思惟への注目」、「解釈的営為としての文学芸術の分析」を掲げ、それに沿って分担研究を統括する。

具体的には、三名の研究分担者が、それぞれ扱う主題、特に人物とテキストを特定し、それに関する同時代状況を把握するための資料蒐集を行い、その読解、検討を通じて、上記の比較研究への視点を見出す。そ

れに基づいて、意見交換および共同考察を遂行する。各研究分担者の主たる対象領域は次の通りである。

市川裕：古代にあってユダヤ教が被った最大の試練は、西暦70年のエルサレム神殿の破壊と都市エルサレムからの追放という事態で、この苦難に対する問いと、蘇生のための希望が、口伝律法ミシュナー編纂の原動力であった。したがって、ミシュナーという広義の聖書解釈がどのような創造的営為の産物であったのかを、狭義の聖書解釈であるミドラシュとの相互関係に留意しつつ分析する。そして、キリスト教が聖書の律法に対して取った態度が、どこまでナザレのイエスにおける聖書解釈の独自性に起因するものであるかを浮き彫りにしたい。

鶴岡賀雄：主にカトリック圏の神秘主義的聖書理解の伝統を検討する。とくに、古代以来の聖書釈義法に根ざしながらも、中世後期から近世・近代の神秘家たちがいかにして従来の枠組みを突破して、宗教経験の新しい表出形態としての聖書解釈スタイルを工夫したかを追跡する。その際、同時代のスペインや南仏におけるユダヤ教神秘主義の動向との関わりを見ることで、創造的営為としての神秘主義的聖書解釈の特徴を捉えることが期待される。

中村信博：プロテスタントにおける聖書解釈の伝統と実際の聖書教育のありかたについての理論的枠組みを整理し、現代の趨勢である聖書学的聖書解釈を、プロテスタント的聖書解釈の流れに位置づける。また、旧約聖書の生成のプロセスにおいても、たえずテキストを反芻し伝統のなかで読み解いてきた古代ユダヤの思惟があったとの視点から、原典テキストそのものが複合的な可能性を豊かに秘めていることを解釈の歴史によって明らかにすることを目指す。

A04-36・計画研究

古代ギリシアとオリエント世界

研究代表者 内山 勝利
京都大学大学院文学研究科 教授

研究分担者 納富 信留
九州大学大学院人文科学研究科 助教授

今般の特定領域研究「古典学の再構築」において、研究項目「古典の世界像」に所属する両申請者は、古代ギリシア・ローマの世界像の解明を課題としている

が、「計画研究」としては特にわれわれの古代ギリシア世界についての理解のあり方を、とりわけオリエント世界との関係に重点を置きつつ、哲学および文芸作品を通じて再検討することを試みたい。課題の遂行において、内山はオリエント世界とギリシア世界との相互関係面の解明に重点を置き、納富は主として古代ギリシア内部からその思想的特質の解明を目指すことに努めるものとする。

これまで内山は、プラトン、アリストテレスの哲学思想に持続的に取り組むとともに、数年来「ソクラテス以前」の初期ギリシア哲学研究に、むしろ重点的に携わってきた。それを踏まえてギリシア思想全体の動向を総体として見直すとき、初期ギリシア哲学の動勢は、むしろ一面においてソクラテス、プラトン、アリストテレスに代表される「アテナイ哲学」を準備するものとしてそこに糾合されていくとともに、実際には、むしろそれとは別個の伝統を発展・維持させつつ、いわゆるヘレニズム時代の諸思想の中に、意外に根強く存続していったことに改めて気づかされる。その「現代的」特質のゆえに、ギリシア哲学に対するわれわれの視野を大きく占めている「アテナイ哲学」も、その時代にあっては、かえって初期ギリシア哲学とヘレニズム諸思想とを一貫する大きな流れの中に孤立して特殊地帯をなしている、というのが実際のありようであろう。

そうした新たなスケールに即してギリシア哲学を見直すとき、「ギリシア的理性」「ギリシア的ロゴス性」の実態は、今日の通念的理解をこえて、より多様に異なった様相を顕してくる。本来は、きわめて豊かな重層の内実を持っていたはずの「理性」や「ロゴス」が、歴史の経過を通じて次第にその活力を失い、今日においては、そのわずかな一面のみに還元されたものが、それとして受け取られ、またしばしば批判の対象とされているものと考えなければならない。今回の特定領域研究において、これまで主として古代ギリシアの著作にもとづいてギリシア思想の本姿を捉え直し、その中に位置するプラトンやアリストテレスの思想をも新たな視点から再評価しなおすことを試みてきた。今後は、さらに考察の重点をその源流への遡源と伝承過程の追跡の局面に移し、ギリシア思想をより相対的な視野から俯瞰することで、その特質の把握に努めるものとする。特に内山は、最近改めて注目されつつあるオリエント的要因との有機的連関の解明を主要な課題の一つとする。特に、初期ギリシア哲学の成立過程、ヒッポクラテスおよびガレノスに代表されるギリシア医学思想の解明（主としてそれらにおける哲学との結節

点や影響関係を明らかにする）を通じて、当該課題に取り組みたい。

また本年度より分担者として参加する納富は、むしろギリシア思想文脈内在的な立場から、その特質の解明に重点を置きつつ、内山と相補的に課題の遂行を分担する。特に「哲学」の成立過程とそれを支える基本要因を根本的に考察しなおすことで、ギリシア思想の最も重要な諸側面を明らかにしていくことに努める。

A04-37・公募研究

動物の表象 中国と西洋の対峙

研究代表者 中島 隆博
東京大学大学院総合文化研究科 助教授

本研究の目的は、中国と西洋の間で〈動物〉を表象する仕方がどのように異なっており、それが如何なる倫理的・政治的な帰結をもたらすのかを明らかにすることである。そしてその成果を踏まえて、現代の動物をめぐる生命科学の議論が前提している問題構成、なかでも人間中心主義的な生命論を問い直したい。

そもそも従来中国思想研究において、動物がどのように表象されるかが正面から問われることはなかった。無論、人間の本質である「性」を問題にし、そこに道徳の基礎を確立しようとする人性論において、人間ではないもの、そこから人間が離れなければならないものとして、動物が取り上げられることはあったし、政治的な秩序である華／夷の別を論じる際に、「夷狄」という他者が「禽獣」に等しいものとして定義付けられることもあった。しかし、動物に焦点を当てて、動物を表象するその構造自体を問いに付すことは想定されもしなかったのである。なぜならば、この表象の構造はあまりに自明なものであって、それを疑うことは中国的な世界像そのものをぐらつかせることになるからであった。したがって、本研究はまず第一に、従来の中国思想の問い方を変更し、あらたな切り口を示すことで、中国的な表象構造を明らかにすることが予想できる。

とはいえ、これが可能なのは中国思想の内部からというよりも、他の思考との出会い（あるいは出会い損ない）からである。自明性が問われるのは、それに属さない外の思考からなのだ。したがって、本研究では、第二に、中国と西洋の対峙、具体的には明末でのキリ

スト教と仏教そして儒教との論争を手掛かりにしながら、問いを進めていきたい。いったい 動物 の表象における両者の差異は、いかなる哲学的・神学的・倫理的・政治的な前提に基づいているのか、そして、どこで両者は相容れないのか、そしてこの対峙がもたらす帰結はいかなる意味を有しているのか？このためには、すでに蓄積されている、明末のキリスト教受容に関する諸研究を参照する必要がある。しかし、管見の限りでは、「戒殺生」を中心として争われた論争は、その総体が十分に利用可能な状態にはない。仏教徒側からの反論にしても、宣教師たちの間での議論にしても、資料を収集しそれを翻訳するという作業がどうしても必要である。また、この論争が中国思想史においてどのような意味を持つのか、また同時代の西欧の思想状況、なかでも修道院運動と異端審問におけるカニバリズムや供犠の問題とどう切り結ぶのかについては、研究が待たれているところである。本研究ではこうした点にも目を配っていかうと考えている。

そして、第三に、動物 の表象を広く捉えなおすことを通じて、古い問題であると同時に現代的でもある、生命の価値について考察を進めたい。それには、「生命」という概念に「価値」を付与してきた近代の思考の歴史を批判的に検証する必要と同時に、たえずそこに付きまどっている人間中心主義的なパースペクティブを根底から問い直さなければならない。なぜなら、動物を貶視し人間を尊重する人間中心主義的な言説は、動物に対する度を越した道具視とともに、人間の中への安易な適用に帰結していったからである。なぜ「人を殺してはならない」のに、「動物を殺してもかまわない」のか？この切迫してもいる問いに、わずかでも応える材料を提示することが、古典研究に課せられた現代的な意味の一つであると思う。

A04-38・公募研究

仏教聖典研究方法の再考

大乘という概念の問い直しを通して

研究代表者 下田 正弘
東京大学大学院人文社会系研究科 助教授

西洋世界に近代仏教学が生まれてすでに180年あまりが経過した。その間に蓄積された膨大な知識は、複数の基本的なカテゴリーのもとに収められ組織されて

いる。しかしながら現在最も大きな問題は、その枠組み自体が問い直されなければならない状況に至っていることであり、その最たるものとして 大乘・小乗 というカテゴリーがある。

いかに新たな情報が生まれても、それが組織化され、意味付けられるべきフレームワークに問題があれば研究の発展は望めない。本研究ではこの2年間に、(1) 今日までの東西学界における仏教学の研究史を大小乗の区別に焦点を当てて再整理し、その成果に(2) 研究代表者がこれまで進めてきた 大乘涅槃経 および関連文献の研究成果を総合して重ね合わせ、こんにちまで仏教研究において支配的であった大乘・小乗というカテゴリーの有効性と限界とを明らかにする。この過程において、(3) 仏教における重要な概念たとえば 菩薩 涅槃 仏陀 などが、このカテゴリーを越え、インドの広い地平に据えられてはじめてよりよく理解されるべきタームであることが例示されるだろう。以下この方針を補足してみよう。

仏教の歴史を理解するカテゴリーとしての大乗・小乗という概念は、わが国のみならず海外においてもこんにちまで変わることなく研究者の間で踏襲されてきた。けれどもこのことばは(1) 菩薩乗、仏乗、などと比較していかなる特殊な意味を持つのか、(2) 大乘仏教に属するはずのチベット仏教においてなぜ小乗の俱舍論を学ぶことを必須とするのか、さらに同様に必須学であるプラマーナは大乘、小乗のいずれに属すとも判断されていないのはなぜか、(3) そもそもこのことばの内包と外延は明瞭なのか、などの問題を取り上げたとき、そのいずれにも明確な解答の与えられない、きわめて曖昧な概念であることがわかる。本来、北伝の仏教思想史に固有であったこの概念を、仏教史全体を理解するための基本的なカテゴリーとして用いようとする態度には無理がある。

この問題を扱うには、まず近代において仏教研究が進められる中、いかなる経緯で大乘という概念が仏教史を整理する際の中心的位置を占めるにいたったかを明らかにすることから始めなければならない。この研究方法の問い直しによって、現実に存在する仏教世界と、学問としての仏教研究との間に、密接な影響関係があることが明らかになるだろう。

そして研究代表者が過去に研究テーマとして進めてきた文献、大乘涅槃経 は、小乗と大乘との枠に囚われずに考察したとき、その全容がより鮮明になる格好の材料である。加えてこの 大乘涅槃経 には、菩薩、涅槃、仏陀など、これまでの理解によれば大乘の重要な概念とされるタームが現れている。これらがい

ンド仏教に固有の地平に戻されたとき、単に論理的な概念としてではなく、隠喩的な背景を持って機能していることが明らかとなり、仏教世界が抱えた古代インドの世界像がそこに見えてくるだろう。

最後にこの研究の意義を、現在の学界の動向の中に位置づけておこう。本研究は、現在欧米の諸学者によって問い直し始められた、相互には直接関係のない二つの大きな研究動向、すなわち「初期仏教における研究方法の検討」(R. Gombrich, L. Schmithausen, S. Collins, S. Hamilton, R. Gethin, etc.)と、「大乘概念の問い直し」(P. Harrison, G. Schopen, J. Silk, A. Skilton, J. Nattier, etc.)を見据えたものである。前者は、外から超越的にカテゴリーを押し付けて研究対象を分析するのではなく、歴史状況の中で仏教徒がいかなる現実に向かい合ったかを叙述する、その方法を問い、後者は個別の経典や碑文の研究を通して、大乘・小乗という枠組みの問題を直接に問う。しかしこれらの二つは、こんにちの仏教研究を見直し、古典研究への具体的提言をなすものとして総合的に捉えるなら、より意義の大きなものとなる。本研究はまさにそのことを企図するものである。

A04-39・公募研究

インド古典における言語論の比較論的再検討

研究代表者 赤松 明彦
京都大学大学院文学研究科 教授

研究目的

インド古典期(パタンジャリの『文法学大註解書』が現れた紀元前2世紀頃から新論理学派の言語理論家ジャガディーシャが活躍した1600年頃までを、ここでは想定している)において、長大な議論が続けられ、様々な見解が提示されて来た言語論・言語哲学の特質を、テキストの精密な読解と比較論的な観点からの再検討を通じて明らかにしたい。具体的には、5世紀の文法学者にして言語哲学者であるバルトリハリの主著である『ヴァーキヤ・パディーヤ』(第1巻,第2巻についてはすでに翻訳研究の成果を发表済)全巻の読解研究を完了し、このテキスト全体を対象にして、文法学と言語哲学に関連する主要な語彙、鍵概念を抽出し、そこでの概念規定を明確に把握することをめざすこととする。また、バルトリハリ思想の受容と批判と

いう観点から、『ドゥヴァーダシャーラ・ナヤ・チャクラム』(ジャイナ教の哲学書で6世紀頃の成立)をとりあげ、そこに見られる議論を分析したい。このテキストは、文法学と哲学の関係を考究する上で大変重要なテキストだと思われる。作者のマツラヴァーディンは、パーニニ以来のインド伝統文法学の議論を、「全ての学説にとつての定説」とみなし、そこでの議論を対照しつつ、モノ(存在)をめぐる様々な見解についての考察を積み重ねているが、文法学の議論と哲学(存在論)の議論は、当然のことながら違ったレベルにあるものであり、この違いに気づいた上で真に「哲学的な議論」(ドグマではなく)と呼ぶにふさわしい議論を展開するこのテキストは、インド思想史上でも大変重要な位置を占めるものと言ってよいだろう。このテキストについては、これまで余りまとまった研究はない。文法学と哲学(存在論)の関係についての考察は、それ自体言語哲学の課題として、ギリシア以来の西洋哲学の伝統の中でも議論されて来たものである。「古典の世界像」班において実施される共同研究会を通じて、この問題について考察する様々な観点・知見を学び、比較論的な考察へと議論を展開することもまたここでの目的である。

研究計画・方法

古典インドにおける言語論・言語哲学の特質と展開を文献学的方法と比較論的方法のふたつの方法論を使って再検討するために、以下のような作業を行う。これはまた新たな方法を模索する作業でもある。

- (1)『ヴァーキヤ・パディーヤ』第3巻に対するヘーラーラージャの注釈の全文テキストデータベースを作成する。(他の巻については、本文および自注の電子テキストは作成済。)
- (2)作成されたテキストデータベースに基づいて語彙研究と思想研究を行い、思想文献研究におけるコンピュータ利用の実際的に有効な方法を探ってみる。(従来は電子テキストの作成とそれに基づく索引の作成が、PC利用の一般的方法であったが、これは思想研究とは何の関係もない。思想研究として有効と思えるのは、ネットワーク上の共同研究作業を通じた新たなテキストと思想の産出であろうか。)
- (3)言語論・言語哲学を専門とする諸領域の古典研究者との討議・共同研究を通じて目下の関心の中心に位置する、文法学と哲学(存在論)についての考察を進めるとともに、「古典の世界像」班における共同研究(調整班研究)に参加して、そのなかでの討論を通じて本研究の深化をはかる。

航海案内書の世界像

研究代表者 新谷 英治
 関西大学文学部 教授

研究目的

一般に航海案内書とそれに付された地図は、航海に際して実際に役立つことを第一の目的に作成されたものと考えられる。一方で、航海案内書と付図が作成されるには、対象地域に関する地理的な空間認識が前提になっており、その意味で、航海案内書は単なる実用書にとどまらず、作成当時の人々の世界像を表現しているものと考えられよう。本研究は、いわゆる「大航海時代」にも重なる注目すべき時代である15、16世紀に西アジア・イスラーム世界で作成された航海案内書に着目し、そこにこめられたさまざまな情報を多角的に分析・検討することによって当時のイスラーム世界における世界像を再構築しようとするものである。

具体的には、16世紀初頭にオスマン朝(1299 - 1922年)で編纂された地中海航海案内書である『キターブ・バフリエ』*Kitāb-i Bahriya*を主たる分析対象とする。オスマン朝は15、16世紀を通じてアジア・アフリカ・ヨーロッパに跨る巨大な国家になり、同時に地中海世界の有力な海上勢力となっていた。本書は、謂ば「オスマン朝の海」であった地中海における航海情報を詳細に述べるものであるが、あわせて、当時オスマン朝において知られていた、中国・東南アジアから大西洋・「新世界」に至る全海域(当時のいわゆる「七つの海」)についての解説を含んでいる。地中海のみならず、世界全体にわたる情報を与えるものであり、その意味で16世紀のイスラーム世界における世界像を如実に物語る著作である。オスマン朝のみならずイスラーム世界全体においても類書がまれであり、また多くの写本が作成され利用された貴重な「古典」と言うべきものである。本書に現われる世界像を多角的に分析し、あわせて、ヨーロッパや東アジアなど他地域に見られる世界像と比較検討することにより、16世紀に至るイスラーム世界における世界像の実相を明らかにすることができよう。

特色と意義

『キターブ・バフリエ』は水路誌や、13 - 17世紀に地中海で用いられた文章型あるいは地図型の航海案内書であるポルトラーノ、さらにはイスラーム世界の地理書の伝統につながるとされる。ただ、それらとは

明らかに異なる特徴を有しており、16世紀前後の時期についていえば、オスマン朝のみならずイスラーム世界全体でもほとんど例を見ない個性的な航海案内書である。したがって本書の分析を通じてムスリム(イスラーム教徒)の世界像を探ること自体が研究の特色であり、また独創的な点である。

『キターブ・バフリエ』に盛り込まれた情報は歴史的情報、地理的情報などを含めて多様かつ豊富であり、そこから地中海世界を中心にした世界像を探ることも可能であり、また世界全体に互る包括的な世界像を再構成することも可能である。またこのようにして捉えられたムスリムの世界像を、当時のヨーロッパや東アジアなどの地域に見られる世界像と比較することにより、イスラーム世界と非イスラーム世界における世界像の共通性と相違点が明確になり、「近代」の入り口に立った当時の人々の世界認識を偏りなく真に理解することができる。この点にこそ本研究の意義があると考えられる。

位置付け

『キターブ・バフリエ』に関しては、P. Kahleらの地理学的観点からの研究に始まって近年のS. Soucekの文献学的研究、Gülsel Rendaの図像学的研究に至る比較的多くの蓄積を我々は有している。しかし、それらは謂ば『キターブ・バフリエ』の内容の個別的・部分的な分析にとどまっており、本研究が目的とするような、当時のイスラーム世界における世界認識・世界像を再構築する試みはほとんど行われていない。

研究計画・方法

次のⅠ、Ⅱの内容と手順で研究する。

Ⅰ 基礎作業

1. 『キターブ・バフリエ』ヒジュラ暦932年本系写本の内容分析
 世界の海域を解説する韻文序及び地中海を解説する本文を詳細に分析し、そこに現れる世界像を把握する。作業にあたっては、オスマン=トルコ語で書かれた原文と日本語訳のデジタル・データ化を行い、コンピューターによる分析を進める。
2. 15、16世紀のイスラーム世界における世界像に関わる文献の調査、入手及び分析
3. 15、16世紀の非イスラーム世界における世界像に関わる文献の調査、入手及び分析

Ⅱ 分析と検討

1. 15、16世紀のイスラーム世界における世界像の分析・検討
2. 15、16世紀の非イスラーム世界における世界像の

A04-41・公募研究

10～13世紀東アジア史の歴史文献研究

元代における『遼史』『金史』『宋史』編纂を中心として

研究代表者 古松 崇志
京都大学人文科学研究所 助手

10世紀から13世紀にかけての東アジア史とは、キタイ帝国（遼）の成立と唐朝の崩壊よりモンゴル帝国が金（女真）・南宋政権を滅ぼすまでの時期、すなわち、おおそ前半期には遼と北宋とが、そして後半期には金と南宋とが並立した時期を指す。この時期を特徴づけるのは、東北アジアから勢力を南へ広げた遊牧を中心とする国家である遼・金が、南の中国本土によった宋を軍事力で圧倒するという構図であった。ゆえに、最近幾人かの論者が指摘しているように、この時代の東アジア史を考えるためには、これまで研究が盛んに行われてきた宋代史のみならず、遼・金時代の歴史研究をも含め、総体的にとらえ直す必要があるのは、至極当然のことと言わねばなるまい。

この時代の歴史を理解するうえで根本史料となるのは、『遼史』『金史』『宋史』の三つの正史である。これらは、13世紀前半にユーラシアの広い領域にそれまでに類を見ない大帝國を築いたモンゴル帝国（その中核が元となる）の支配下で編纂されたものであった。すなわち、東アジアの金・南宋の支配領域はともに元の版図に入ることになったが、後の王朝が滅ぼした前代の王朝の歴史書（＝正史）を編纂するという中国王朝の歴史編纂の伝統を受け継ぎ、元代中国において三つの正史が国家の手で編纂されたのである。この正史の編纂は金、南宋それぞれの王朝を滅ぼした後に既に持ち上がっていたことではあったが、紆余曲折を経て、結局『遼史』も含めた三史がまとめて編纂されることになったのは元代末期になってからであり、場所は旧南宋領の江南においてであった。最近の日本における一部の研究によって明らかになりつつあるように、14世紀に入ってから元代江南では、国家の援助のもと、南宋において興りつつあった文化振興がより広範に推進され、とりわけ国家の手による編纂事業や出版事業が、前代とは比較にならないほど大々的に行われた。

こうした国家編纂事業の頂点として、三史の編纂をとらえることが可能である。この三史を中心として、モンゴル時代に先立つ遼・宋・金時代の東アジア史に関わる歴史文献は、元代になってから編纂されたり出版されたりしたものが多く、その大半が元代江南を潜り抜けてきたものだと言って過言ではない。また、宋代から元代にかけての貴重な文献史料を後代に伝える役割を果たした明初の一大類書『永楽大典』（特に宋代の史料はその根幹に関わるものを多くこの『永楽大典』に負っている。例えば『統資治通鑑長編』、『宋会要輯稿』など）にせよ、元末における編纂・出版の流行の遺産であるとみなすことができる。こうした事実は、意外なほどにこれまで注意されていない。もちろん、南宋（特にその末期）時代における著述活動や編纂事業の隆盛もまた看過し得ないものである。より規模は小さいが、金代後半の華北についてもそのことは当てはまる。こうした前代からの伝統を受け継ぎつつ、それを大幅に拡大して隆盛に導いたのが元代の文化振興政策であった。以上のように、10世紀から13世紀の東アジア史を考えるためには、後の時代である元代における歴史編纂について明らかにすることが不可欠なのである。

具体的な研究の方法としては、第一に、遼・金・宋各王朝で正史の材料となるものがどのように集積・編纂され、その材料が元代になってからどのように正史にまとめあげられていったかという過程を、『遼史』『金史』『宋史』それぞれについて明らかにすることである。（『遼史』『金史』については、つとにそれぞれ馮家昇、藤枝晃による優れた研究があり、宋代における歴史編纂の研究も多く存在し、参考になる。）もう一点は、元代の文化政策の一環として、三史編纂事業をとらえることである。1328年にクーデタによって文宗トクテムルが即位すると、以前にもまして国家編纂事業を盛んに推進する。文宗トクテムルは、奎章閣という文化事業専門の部署を設け、そこに漢人やウイグル人の文人官僚を集めて、『経世大典』という政書を編纂させ、さらに書物や書画を収集したり、書物を翻訳させたり、中国の古典の講義をさせたりした。その流れは次に即位した順帝トゴンテムルの時代まで受け継がれ、ついに懸案の三史編纂が成就するのである。こうした元代後期における文化振興政策の流れをふまえて、三史編纂に携わった人々の構成の検討など編纂事業の内容を詳細に検討し、その歴史的意義を明らかにしていく。

イスラーム古典における死生観と生命倫理の研究

研究代表者 飯塚 正人

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 助教授

研究目的

本研究は、イスラームの聖典であるコーランとハディース（預言者ムハンマドの言行録）はもとより、神学書・法学書を中心としたイスラームの古典を渉猟し、読解することで、イスラームにおける死生観と生命倫理とを、文献学的に明らかにすることを目的としている。

20世紀における生命科学の著しい発展は、脳死、安楽死、臓器移植、妊娠中絶、遺伝子操作、体外受精といった、いわゆる「生命倫理」に関わる諸問題を人類に突きつけた。しかし、「生命をどこまで人為的に操作してよいか」というこの問いが、古典研究を通じて得られる、それぞれの文化に固有の死生観・人間観と結びつけて語られることは、現実には稀だったと言ってよい。この分野における近年の画期的な共同研究の成果である『死生観と生命倫理』（関根清三編、東京大学出版会、1999年）が、死生観と生命倫理を連携した考察の可能性を開いたとはいえ、古典研究と生命倫理をめぐる今日的議論との間に横たわる溝は予想以上に深いものがある。

もっとも、古典に見られる死生観と現代における生命倫理の議論が不可分なまでに結びついている例がないわけではない。その代表がイスラーム世界である。そこでは、脳死にせよ、臓器移植にせよ、体外受精にせよ、生命倫理に関わるあらゆるテーマが、個々のウラマー（イスラーム法学者・神学者）が古典を参照したうえで論じられる。言い換えれば、古典が現代社会の最先端とも言うべき話題に直接関わっているのである。とはいえ、当事者によるこのような作業が常に学問的に行なわれているわけではなく、古典から導き出されたはずの結論はしばしば政治を巻き込んだ大論争にまで発展する。スンナ派イスラーム教学の総本山であるエジプトのアズハル機構で繰り広げられてきた脳死をめぐる論争は、政治的配慮が古典の読解に影響を与えた典型的な事例と言ってよいだろう。

以上のような状況認識を背景に、本研究では、主としてスンナ派の古典神学書・法学書から、厳密な読解に基づいたイスラーム固有の死生観・生命倫理を導き

出すことを目指す。また、その過程で、死生観・生命倫理に関わる古典テキスト群をデータベース化するとともに、イスラーム的死生観のひとつの典型と見なし得る古典テキストの翻訳を行いたい。

古典に見るイスラームの死生観と生命倫理については、国際的にもほとんど先行研究がなく、国内では上記『死生観と生命倫理』に収められた鎌田繁論文のほか、板垣雄三監修、山岸智子・飯塚正人編『イスラーム世界がよくわかるQ&A』などの一般書に若干の言及があるのみである。こうした状況のなかで、イスラーム古典における死生観と生命倫理を明らかにすることは、単にイスラーム研究者のみならず、広く人文・社会科学の研究者、またムスリムか非ムスリムかを問わず、生命倫理一般を扱う議論に貢献するところが大きいと考えられる。

研究計画・方法

1. 平成13年度：

(1) イスラームの死生観・生命倫理に関わる古典テキストのデータベースを構築する第一段階として、東京大学文学部イスラーム学研究室、同東洋文化研究所、財団法人東洋文庫、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科等の所蔵するイスラーム法学書・神学書、およびその研究文献を参照し、まずは現代エジプトのムスリム思想家たちが生命倫理を論ずるにあたって依拠している基本文献の校訂・出版状況を調査し、データベース化する。これと同時に、国内外においてイスラーム古典資料の収集と調査を行い、収集できた資料の読解を進めるとともに、当該テキストのデータベース化を進める。次いで死生観・生命倫理に関わる古典神学書・法学書の中から、イスラーム世界で広く読まれているテキストを選び、その本文（場合によっては章単位）を邦訳する。

(2) イスラームの死生観・生命倫理をめぐる議論は、エジプトのほか、サウディアラビアやイランなどでも独自の宗派的思想に基づいて展開されている。また、イスラーム以外の文明圏における死生観・生命倫理を研究する研究者との共同研究も、議論の枠組みを構築していくうえで不可欠と考えられる。よって、「古典学の再構築」に研究分担者・協力者として参加している研究者を中心に、当該研究者との合同研究会を開催し、情報交換等を行いたい。

2. 平成14年度：イスラームの死生観・生命倫理に関わる古典テキストの収集・調査とデータベース構築を継続するとともに、平成13年度の成果を公開する。また、13年度から継続するテキストの翻訳を完成し、紙媒体または電子媒体で出版する。さらに、死生観・生

命倫理に関する研究仮説の検証を中心に調査・研究の総括を行いつつ、現代社会においてイスラーム古典が持つ意味にまで踏み込んだ研究論文を執筆する。

A04-43・公募研究

イスラーム哲学におけるアリストテレス『デ・アニマ』受容と靈魂論の展開

研究代表者 小林 春夫
東京学芸大学教育学部 助教授

研究計画の概要

本研究は、アリストテレスの著作である『デ・アニマ』の受容史をたどることによって、イスラーム哲学における靈魂論の成立と展開を明らかにするものである。

1. 研究範囲

イスラーム哲学は9世紀から10世紀にかけてアッバース朝下で行われたギリシャ古典のアラビア語訳に始まり、イブン・シーナー（＝アヴィセンナ、1037年没）による体系化を経て、スフラワルディー（1191年没）の神秘哲学に至る。この流れを大まかに3つに区分し、それぞれ「移入期」「確立期」「展開期」と名付ける。筆者は「古典学の再構築」の第Ⅰ期（平成11年度～平成12年度）より公募研究として上記の研究を進めてきたが、第Ⅱ期においては特に「展開期」に焦点を絞り、この時期の『デ・アニマ』受容の実態と靈魂論の特徴を解明したい。

具体的に言うと、(1)スフラワルディーの『対話の書』(al-Mashari' wa-l-Mutarahat)の自然学を中心に写本研究を行い、そこに述べられた靈魂論の内容を分析し、イブン・シーナーのそれとの関係を明らかにしたい。(2)また『開示の書』(al-Talwihat)の自然学部分について、同書に関するシャハラズーリー(13世紀末)およびイブン・カンムーナ(1284年没)の注釈書を分析し、それぞれの解釈の特徴ならびに両注釈の関係を明らかにしたい。(3)次にスフラワルディーを祖とする「照明学派」(Ishraqiyun)についてであるが、上述のシャハラズーリーの著作『比喩と象徴』(al-Rumuz wa-l-Amthal)を校訂し、その内容分析を進めたい。

以上によって、イブン・シーナー以降の靈魂論の発展を文献学的に跡づけるのが本研究の目的である。

2. 特色ならびに意義、研究の位置付け

上で述べた3区分のうち、「展開期」はイスラーム思想史の観点から見て最も創造的かつ多産的な時期である。たとえばこの時期、ギリシャ哲学の正嫡であるファルサファ(falsafah)の伝統とスーフイズムやシーア派などの思想伝統が本格的に出会い、後にヒクマット(hikmat)と呼ばれ今日まで受け継がれているイスラーム思想の基礎が築かれた。しかしながら、以上の概略はこれまで多くの研究者によって指摘され承認されてきたにもかかわらず、その詳細はほとんど明らかにされていないといっても過言ではない。その原因の一つとして、この時期の重要なテキストが未刊であり、またたとえ公刊されていたとしても極めて不完全であることが挙げられる。本研究はそうした空白を写本研究とテキスト校訂によって埋めようとする点に特色と意義がある。

また、この時期の靈魂論は自然学の一分野であるというよりも、むしろ哲学的探究の原点である「自己」の究明と捉えられていた。たとえば本研究がその校訂と分析を目指すシャハラズーリーの『比喩と象徴』は、自己の認識を起点として、それが絶対者(神)に到達する過程を描き出しており、そこには独自の世界観と人間観を見て取ることができる。古典の世界像を明らかにするA04班の公募研究として、本研究が靈魂論に照準を合わせる理由はここにある。

また、この時期の靈魂論をイブン・シーナーのそれと比較し、正確に位置付けることができれば、アリストテレスの『デ・アニマ』受容に始まるイスラーム的靈魂論の展開に一定の歴史的展望を与えることができる。そしてこのことは、同じくアリストテレスの『デ・アニマ』を受容した西洋哲学との比較を容易にし、それによってイスラーム思想の特徴を明らかにする手がかりとなるであろう。

A04-44・公募研究

西洋古代の「心の哲学」における基礎概念の成立と変容

研究代表者 中畑 正志
京都大学大学院文学研究科 助教授

研究概要

われわれは、心について、そしてまた心とそれがか

かわる対象や世界との関係について、いくつかの基礎的な概念をもっている。たとえば、心のはたらきとしての「理性」と「感情」、あるいは「想像（表象）」、また心のはたらきの「対象」、そしてそもそも「心」あるいは「精神」という概念。これらは哲学における根本概念というにとどまらず、すでに日常的に使用されるほどに、われわれのものの見方の内部に浸透している。しかし「心」をめぐる西洋の思考の歴史を振り返るとき、それらの諸概念は、はじめから自明なものとして使用されていたわけではなかった。むしろ実際には、プラトンやアリストテレスが心と世界との関係を記述するために用いた諸概念が、その後の各思想的学派においてある特定の意味へと限定あるいは変容させられた上で、各学派の中心的概念として使用されるという現象がしばしば見られる。一例を挙げよう。プラトンおよびアリストテレスにおいてはかなり包括的な意味で用いられた「パトス」というタームは、ヘレニズム期の哲学、とりわけストア派においては、現代の「感情」や「情念」に近似的な意味に限定され、また術語的に頻用されるようになった。このように、プラトンやアリストテレス以後に、心や魂をめぐる思考の全般的な変遷にしたがって、限定あるいは変容された意味を獲得していくという経緯は、「パンタシア」（表象・想像）など他の基礎的な概念についても当てはまる。さらに、心のはたらきの「対象」object<obiec-tum などの概念は、プラトンやアリストテレスにおいてはそれに一義的に対応するタームは存在せず、むしろストア派と新プラトン主義を思想的背景としながら中世哲学のある思考の圏内で確立していったと考えられる。

しかしこうした基礎的な諸概念についての歴史的解明は現状では決して十分とはいえない。たとえば「パトス」について、プラトンとアリストテレスにおいてどのような意味内容をこめて使用されたのか、という点でさえ、研究は満足できる状況になく、そのために「プラトンにおけるパトスとロゴスの対立」というような、少なくともタームの上では成立しえないような図式がしばしば横行している。そしてそののちの受容と変容の経緯についても、アリストテレス以後各個別学派における「パトス」概念についての研究は盛んであるが、この概念がそれぞれの学派で限定的意味で使用されるようになった歴史的・思想的経緯についての解明は手薄である。

本研究は、そうした基礎概念の成立と転換の過程をテキストに即して解明することを試みる。すなわち、心とそれがかわる対象や世界との関係について、プ

ラトンとアリストテレスにおいてそれぞれどのような理解が成立したのか、そしてそれがヘレニズム期および古代後期においてどのように変容したのかを、それぞれの哲学的理論を支える基礎概念の分析を通じて明らかにすることを目指す。

このような本研究は、しかし、ただ単に古代思想研究の欠如を補うことだけを目的とするものはない。研究の射程が現在のわれわれ自身にも及びうことは、たとえば、近代の「感情」emotion「情念」passionなどの概念がストア派のパトス概念の影響を受けたものであることなどからも予想できるであろう。「心の哲学」における基礎概念の成立と変遷を見届けるという試みは、現在のわれわれの「心」についての理解の前提を解明し、同時に「心」について、現代的な概念の枠組みのなかには見えない別の理解の可能性を示唆しうるのである。

A04-45・公募研究

古代ギリシア哲学のコスモロジーにおける生命像の探究

研究代表者 瀬口 昌久

名古屋工業大学共通講座教室言語文化講座 助教授

研究分担者 坂下 浩司

名古屋工業大学共通講座教室言語文化講座 講師

21世紀の科学技術と思想との最重要な課題のひとつは、遺伝子工学を中心とした生物工学のさらなる進展にみられるような、生命についての精密化した物質的機械主義の世界像と、人間が歴史的文化的に培ってきた生命観をどのように関係づけられるかにあるだろう。本研究は、近代科学を生む思想の母胎となった西洋の古代哲学における生命観の変遷をたどることによって、現代の先端科学技術によって揺れるわれわれの生命観を検証し、生命理解に歴史的な視座と基盤を与えることを大きな目標にすえている。

西洋古代哲学研究においては、ソクラテス以前哲学者、古代アトミズム、プラトン哲学、アリストテレス哲学、ヘレニズム期の哲学諸派に関するそれぞれの領域での生命論の個別的な研究は従来存在している。しかしながら、ソクラテス以前哲学者からヘレニズム期にいたる古代哲学史にわたって、世界観の観点から生命像そのものに焦点をしばった今日の学術的水準に耐

えうる研究はまだ数少なく、本研究は挑戦的な取り組みである。また、本研究におけるコスモロジーとは、宇宙創造にかかわる狭義のコスモゴニーではなく、自然万有の生成を含む広義のものであり、宇宙、自然世界、社会とのかかわりにおいて、生命像を検討するという特色をもっている。ソクラテス以前哲学者の魂を基礎とする生命観に対して、古代アトミズムは「物」を生命の究極の基盤においたが、アトミズムの生命観に抗して生命を基盤とする伝統的な生命像を創造的に再生させたプラトンの生命論と、それに異議をとらえたアリストテレスの生命論とを対比させ、ヘレニズム期の哲学において、その生命像の変遷を跡づけることによって、古代哲学全体の眺望をもってわれわれの生命理解の基礎的課題が明らかにできると期待される。

研究の初年度としては、プラトンの生命論とアリストテレスの生命論を取り上げる。プラトンに関わる主たるテキストは『ティマイオス』である。宇宙の創造から、人間や他の動植物までの生成を論じたこの対話篇の分析が、本研究の支柱となる。テキストの精査な読みと、数多い研究論文をできる限りふまえながら、宇宙の生成と人間の生成の関係において、基礎的な論点を抽出することをめざしたい。そのさい、『パイドン』など中期対話篇で行われている心身の二元論的とも見られる厳しい対立の論点との比較検討を行いながら、『ティマイオス』の宇宙靈魂や魂や身体創造における心身関係、幾何学的アトミズムの問題を考察する。

アリストテレスにおいては、『動物誌』、『動物部分論』、『動物運動論』、『動物進行論』、『動物発生論』が主要なテキストになる。とくに、アリストテレスはプラトンを始め他の哲学者に比べて、生物学的研究著作が豊富であるので、なぜ、アリストテレスがそのような生物学的研究に大きな労力を割いたのかを、アリストテレスの哲学としてのその動機と必然性を、プラトン哲学との対比で考察したい。生物学においてアリストテレスは、生物の分類法に関してプラトンの『ソピステス』や『ポリティコス』の「分割法」を批判している。また『天体論』において、アリストテレスはプラトンの『ティマイオス』への批判を表明している。そのようなアリストテレスの批判の妥当性および、両者の見解の相違の根拠を明確にすることもめざしたい。

ギリシア哲学における倫理思想の再検討

研究代表者 朴 一功
甲南女子大学人間科学部 教授

研究目的

本研究は、西洋の哲学史においてはじめて倫理学の分野を切り開き、確立したソクラテス、プラトン、アリストテレスの倫理思想を再検討し、現代のメタ倫理学や応用倫理学とは異なる倫理学の視座を提供することを目的としている。これら3人のギリシアの哲学者たちの倫理思想には、知識と行為の関係等、倫理学の主要問題との関連で本質的な変化と展開が認められるが、その変化は、たとえばソクラテスの知性主義的立場からプラトン、アリストテレスの感情・情念重視の立場への移行などのように、一般に、図式的に捉えられてきた。本研究はそうしたいわば表面的な変化よりもむしろ、その背後にある彼らの哲学的思考と世界観の相違に注意を払い、それらを明確にしながら彼らの倫理思想の異質性と多様性を考察するとともに、さらにはそれぞれの思想の意義をも査定しようとするものである。その作業によって、ギリシア哲学における倫理思想の重要な特質が明らかになるばかりか、倫理学一般への寄与も可能になると期待される。

研究計画

今年度の作業としては、(1) 倫理思想におけるソクラテスからプラトン、アリストテレスへの変遷過程の基底を、徳を技術知と見るソクラテスの見解への、プラトンおよびアリストテレスの反応という観点から探り、その研究成果をまとめるとともに、(2) プラトンの真理論および善の概念の問題に関する考察にも取りかかりたい。(1)の作業は、とりわけプラトンの欲望論の意義を明らかにすることを意図している。他方、(2)の問題は、本研究において昨年まで進めてきたプラトンの言語哲学の考察から呼び起こされたものである。その問題は、<善>のアイデアの意義を批判するアリストテレスの倫理学とも、また善悪・美醜などの価値語の本性を問う現代のメタ倫理学とも重要な関係をもっているため、多面的な考察を必要とするが、今年度はプラトンの真理論の基本的な枠組みを見定めることを目標にしたい。

以上の研究と並行して、これまで進めてきたアリストテレス『ニコマコス倫理学』(京都大学学術出版界『西洋古典叢書』第二期)の翻訳と訳注の作業を今年

度中に終え、さらにその解説文の作成作業にもとりかかって、アリストテレスの倫理思想の骨格を論じたと思う。

B01「伝承と受容(世界)」

B01-47・計画研究

仏教における主要概念のインド・中国・日本における伝承と受容

研究代表者 丘山 新
東京大学東洋文化研究所 教授

研究分担者 土田 龍太郎
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

佐古 年穂
駿河台大学現代文化学部 助教授

インド伝統思想を批判しつつ興起した仏教も、伝統思想や当時の様々な時代思潮を背景として、その思想・教理を形成していったことは明確である。しかしながら、従来の初期仏教の研究では、その伝統思想や時代思潮との関わりがあまり重視されておらず、仏教を大きなインド宗教思想史のなかに位置づけて説明するという思想史構築には十分に成功しているとは言えない。さらに紀元一世紀前後に成立してきた大乘仏教思想もまた、単に仏教思想内部での思想的展開ではなく、インド宗教思想の思想史的な大きな展開と並行な関係を持っていることは間違いない。しかし、この点に関して上記の初期仏教思想の研究と同様に、その説明が十分になされているとは言えない。

本研究では、まず初期仏教から大乘仏教の成立に至るまでの仏教の主要な思想概念を取り上げ、それが、背景としての当時の諸思想潮流とどのような関係を持っているかを十分に視野に入れつつ説明し、仏教思想の歴史展開をインド宗教思想史のなかに位置づけることを試みる。

また、そのような仏教の教説や主要概念がその後展開する仏教の様々な部派の註釈学的教理学の中でどのように受容されいたかを明らかにする。特に、5世紀の Vasubandhu (世親) による『俱舎論』(Abhidharma-kosabhasya) は、時に経量部の立場に立ちながら、説一切有部教学を批判的に整理し組織立てたもので、サンスクリット・テキストが存在する点でも重要な論

書であり、註釈も多い。これはまた、大乘仏教においても「仏教概説」書として重用され、中国仏教十三宗、日本の南都六宗の一つである俱舎宗を生み、チベット仏教においても仏教研究の基礎として位置付けられている。

一方、「有」の批判として「空」を唱えた『般若経』の思想は、アビダルマ仏教の出家至上主義への批判と結びつき、在俗信者たる維摩詰が仏陀の弟子・菩薩に「空」を説く『維摩詰経』にその精華をみた。

インド・西域から伝来した仏典は、紀元2世紀末から漢訳されはじめ、その翻訳は12世紀の宋代まで続いた。中国にもたらされた仏典はその総てが漢字に翻訳され、中国文化圏に組み込まれることになった。それらの漢訳仏典は、現存するものだけでも1500点近くに及ぶ。しかし実際に中国人、特に教団内の出家者だけにではなく、一般の知識人あるいは民衆たちによく読まれ受容された経典は、その1乃至2パーセントに過ぎないと予測される。中国人に受容されたそれらの漢訳経典は、その時々々の時代思潮に関わるものとして受容されたと予想される。本研究では、漢訳仏典の受容を通して中国の各時代の時代思潮の特質を解明する。

丘山は、大乘仏教の代表的な経典である『維摩詰経』を採り上げ、その経典が中国でなぜ受容され歓迎されたのか、中国の各時代いかなる時代思潮に基づいて受容されたのかを明らかにする。そしてインドで仏教経典が編纂された時の本来の趣旨とのずれも対比的に明かされるであろう。また、インドで誕生した仏教思想が中国や朝鮮・日本でどの受容され、変容されたかを明確にしようという本研究は、その独自性ととも、現在国内外の各分野で議論されている東アジア諸地域における文化の受容と交流という大きな課題のなかでも重要な一翼を担うものである。

佐古は、主として『俱舎論』を取り上げる。『俱舎論』は仏教教理の研究において不可欠のものであり、就中、業品は、経量部資料としても重要であると同時に、Vasubandhu の『成業論』とならんで仏教の業思想研究の上でも様々な材料を提供する。ここで行う1) 業品サンスクリット・テキスト校訂、2) Concordance の作成、3) 『順正理論』と Sthiramati の註釈との業品に関する対照表等の成果は、『俱舎論』並びにその註釈書研究、ひいてはアビダルマ仏教研究の更なる進展の為の基礎、並びに材料を提供するものである。

土田は、初期仏教及び大乘仏教の主要概念が、伝統的なヴェーダ文献や『マハーパーラタ』や『マヌ法典』をはじめとするその後のインドの主要な典籍の中でど